

異質な文化をすべて包み肯定する禅

マインドフルネス瞑想療法士 大田健次郎

日本マインドフルネス精神療法協会

マインドフルネス総合研究所

禅の哲学は、民族、国家、宗教、文化の違いにかかわらず、すべての人間の根底に「絶対的一者」を持つものとしています。それは、すべてを包み、受け入れるものです。

そのことを、主に、藤田正勝先生の『西田幾多郎』（岩波新書）でご紹介します。

（凡例）

1. 藤田正勝『西田幾多郎』（岩波新書）の該当ページを（藤田 pxx）と示す。
2. 西田幾多郎全集（岩波書店）は、新旧全集の巻と頁を（新 x 巻 x 頁、旧 x 巻 x 頁）と示す。

西田哲学と東洋思想との交差

「形相を有となし形成を善となす泰西文化の絢爛たる発展には、尚ぶべきもの、学ぶべきものの許多なるはいうまでもないが、幾千年来我等の祖先を孕（はぐく）み来った東洋文化の根底には、形なきものの形を見、声なきものの声を聞くといった様なものが潜んでいるのではなからうか。我々の心は此の如きものを求めてやまない、私はかかる要求に哲学的根拠を与えてみたいと思うのである。」（『働くものから見るものへ 序』旧 4 巻 6 頁、新 3 巻 255 頁）

☆東洋文化、日本文化をその根底においてささえているもの

☆「形なきものの形を見、声なきものの声を聞く」という東洋文化の根底にあるもの

☆「哲学的根拠を与えてみたい」という西田幾多郎

形なきものの形を見る

☆西洋文化は「有を實在の根底と考える」

☆東洋文化は「無を實在の根底と考えるもの」

☆現在は絶対無の限定（大田：ここでは表現とでも思えばよい）

⇒そこには「深い内的生命」、あるいは「無限なる生命の流れ」がある。

情的文化

☆日本文化は「情的文化」だという。

☆対象的知識ではとらえられない、声、形の根底にあり表現するもの、無限に働くもの

時代の中の「日本文化」論

☆1937年（昭和12年）、盧溝橋事件、日本は戦争に向かう。

☆1937年、天野貞祐（西田幾多郎の弟子）が出版した『道理の感覚』で、軍部による中等教育への干渉を批判した。それが翌年、問題になり、絶版にさせられた。その直後の講演。

☆1938年、日本諸学振興委員会主催の講演会で「学問的方法」を講演、1940年に出版の『日本文化の問題』に収録。

☆「西田は決して偏狭なナショナリズムの立場から「日本精神」を問題にしているのではない。日本文化の特殊性を誇張する「日本精神」主義者に対して、西田はそのような態度が排外主義に結びつくことをはっきりと警告している。」（藤田 p167）

世界文化の創造

☆「そのような状況のなかで求められるのは、・・・世界の文化の発展に対して寄与を行うことであるというのが西田の確信であった・・・」（藤田 p 168）

異質な文化との対話

☆「それでは日本精神が「世界的」になるとはいかなる事態であるのか、・・・」（藤田 p 169）

☆「日本の精神的な伝統の最大の「弱点」を、それが「学問」として発展しなかった点・・・」

「空間的な鏡」に映し出すこと、つまり、異質な文化との対決ないし対話を通してそれ自身の不十分性を明らかにすること（「自己批評」）を求めた」（藤田 p 170）

☆「伝統のなかに遺物として見出される精神ではなく、「生きて働く精神」を問題にしなければならないというのが、この「学問的方法」において西田が語ろうとしたことであった。「死して後生きる」という表現はそのことを言い表している。」（藤田 p 171）

多文化主義

☆「講演「学問的方法」において西田は「我々の歴史的な文化を背景として新しい世界文化を創造すると云うのは如何にして可能であるか」という問いを立て、それに対して次のような答えを提示している。」（藤田 p 171）

☆「偏狭な自文化中心主義ではなく、むしろ多文化主義的な発想である・・・」（藤田 p 172）

意味の争奪戦

☆西田が皇室や皇道に言及したことで、西田を批判する研究者がいるが理解不足である。西田は、日本が国の独自性を認めて、世界の立場になることを求めている。

☆「皇道は世界的とならなければならない」という表現もいま述べた意味で理解されなければならない。西田が、当時大きな力をもっていた排他的な民族主義と、政府の帝国主義的な侵略政策に対して明確な批判を有していたことは、「哲学論文集第四補遺」（一九四四年）と題された文章の次の言葉からもはっきりと見てとることができる。」（藤田 p 175）

「真の国家は、他の民族に対して、共に自己自身を形成する歴史的世界の自己形成の立場に於て結合するのである。……

単に排他的なる民族主義から出て来るものは、侵略主義と帝国主義との外にない。

帝国主義とは民族利己主義の産物である。」（一九四四年「哲学論文集第四補遺」）（新 11 巻 197-8 頁、旧 12 巻 404 頁、藤田 p 175）

★（大田）「日本文化の問題」の中でも（旧 12 巻 349 頁,373 頁）、一つの国家が他を支配すること、帝国主義の批判がある。

萌芽にとどまった仏教論理

☆西田は仏教をも批判している。「自己と事物との関わり、さらには客観的存在としての事物に仏教が目を向けてこなかったことを批判するものであったと言ってよいであろう。」（藤田 p177）

「私は仏教論理には、我々の自己を対象とする論理、心の論理という如き萌芽があると思うのであるが、それは唯体験と云う如きもの以上に発展せなかった。それは事物の論理と云うまでに発展せなかった。私は先ず西洋論理と云われるものを徹底的に研究すると共に、何処までも批判的なるを要するのである。」（「日本文化の問題」新 9 巻 13 頁、旧 12 巻 289 頁、藤田 p 176）

徹底的実証主義

☆西洋の科学は「対象認識の学」であるから、「批判的であるべき」

☆「単なる知的な立場から捉えられた世界の論理ではなく、われわれがそこにおいて「作られたものから作るものへ」として世界に関わっているその全連関を把握するものでなければならないということである。」（藤田 p178）

「西洋の科学というのは、主として環境から人間を考える。全自己というものがその中に入って居らない世界の知識である。いわゆる対象認識の学である。無論それが科学というものなのであろう。しかし真に具体的な歴史的事実の世界は、我々の自己がそれに於てある世界でなければならない。真の学問的精神というものが物の真実に行くというにあるならば、それは何処までもかかる世界を把握するものでなければならない。実証的なあまりに実証的なものでなければならない。」（「日本文化の問題」新 9 巻 55 頁、旧 12 巻 344-345 頁、藤田 p 178）

禅は他者を包む、さばかない

以上、西田幾多郎の意図を藤田氏の本でみた。以下は、本日のテーマである、世界におけるテロ、戦争、殺戮を廃絶する方向で、日本の禅の可能性として、大田が付け加える。

★禅で知る根底の絶対的一者は、内在的で、すべての人を包む絶対愛。そむく人間をもさばかない。

禅の絶対的一者は根底でどこまでも包む

「絶対者はどこまでも我々の自己を包むものであるのである、どこまでも背く我々の自己を、逃げる我々の自己を、どこまでも追い、これを包むものであるのである、すなわち無限の慈悲であるのである。」（「場所的論理と宗教的世界観」）（旧 11 巻 435 頁）

禅の絶対的一者はさばかない

「どこまでも自己否定に入ることのできない神、真の自己否定を含まない神は、真の絶対者ではないと考える。それは鞠（さば）く神であって、絶対的救済の神ではない。それは超越的君主的神にして、どこまでも内在的なる絶対愛の神ではない。」

（「場所的論理と宗教的世界観」）（旧 11 巻 458 頁）

V・E・フランクも同様

★各宗教の神は、唯一で共通であると、フランクはいう。このことを自覚すれば、民族、宗教、文化の違いでテロ、殺人が起きることはなくなるだろう。

「もし価値が見出されるべきであり、万人に妥当するような一つの意味が見出されるべきであるとすれば、幾千年も前に一神教を生み出した人類は、この一なる神への信仰 にならって、今やさらなる一步を踏み出さなければなりません。すなわち、それは一なる人類についての知であります。今日では以前よりもいっそう一人類教が我々に必要な のであります。」（『意味への意志』,p36）

「一神教の諸宗派は、相互理解と寛容をもって、共通の究極者の究極的な共通性を自覚することによって互いに結びつきうるのだ、と。諸宗派は、その際、他の諸宗派との 共同性を自覚し、《一神教の一元論》を自覚するようになるのです。しかし、その場合 には、ユダヤ教の最高の祈り《イスラエルの民よ、聞きなさい。われら（各人）の（人格的なる）神はただ一人である！》は、自らを開いて、次のような祈りにならなければなりません。――汝らすべての民族よ、聞きなさい（すべての一神教の宗派よ、聞きなさい）。われら（各人）（各宗派）の神はただ一人であり、唯一にして同じ方である、と。」（『意味への意志』,p103）V・E・フランク、山田邦男監訳『意味への意志』 2002, 春秋社

★禅の哲学や禅の実践は、すべての人間に共通の根底、内在的絶対者を自覚する早道であるかもしれない。